再び〝食糧問題〟を考える

輸入穀類がストップしたら……？

——日本農業の体質への反省——

農林省農事試験場長・農学博士
川井一之

〔世界的視野から農業を見直せ〕

輸入穀類が完全にストップしたら…？これは大変な悽惨地獄が現出し，日本国中は大混乱となり，まさに日本栄養失調列島が現出することは間違いない。

今や，世界第一の農産物輸入国にのし上った（余り名誉なことではないが）日本としてみれば，穀類その他農産物の輸入がストップする状況となれば，石油その他の輸入資源のみならず，輸出貿易もストップするような，異常な時局を迎えるということになるわけだから，まず現実には，そんなことは起こりえないと考えなければならない。

しかし，なおかつ，本稿のようなテーマについて考えてみるということには，やはりそれなりに，今日的な問題というか，日本が，知らず識らずのうちに冒されている社会，経済的病根について，きびしく反省自戒してみるという点において，決して意義なきことではないし，改めて〝農業軽視〟の国民的風潮に覚醒の警鐘を与えるという点で，大きな意味があるものと考えられる。

世界的驚威であった日本経済の高度成長が，石油ショックやインフレ，不況によって，一挙にマイナス成長に転落した事情については，他に譲ることとして，この間に，環境破壊，公害，土地騰貴，人口の都市集中の過剰と過疎地帯の荒廃，農業の衰退，退廃的・刹那主義的消費文化と精神の荒廃等々，われわれ農業を守るサイドにいる者としても，この際，声を大にして訴え，怒りを爆発させたい問題は多々あるが，ここでは，〝将来の展望の上に立って農業の新しい意義を見いだせ！〟という言葉を提起しておくだけにとどめよう。

世界的人口爆発，世界的異常気象，世界的飢餓問題等々…，先般の世界食糧会議でも，食料備蓄等の重大な問題が論議されたが，もはや，たんに日本だけの農業ではなく，世界の中の日本の農業という視点から，この与えられたテーマを中心として，歪んだ日本農業の体質について考えてみることとしよう。

〔「食」栄養の近代化と体質的矛盾〕

〝いちど贅沢や美食の味を覚えたら，逆もどりすることはなかなか難しい〟といわれる。惰性とか習慣というものは，とにかく，おそろしいものである。

勤勉な日本人は，エコノミック・アニマルとか悪口をたたかれながらも，驚異的高度成長を実現しながら，「住」までは十分とはいえないが，「衣」，「食」については，いちおう生活水準の目覚ましい向上を実現してきた。

＜目　次＞

§ 肥料以外の未開発分野へ進出……(2)
チッソ旭肥料株式会社 取締役兼第一販売部長　柴田　観
§ 再び〝食糧問題〟を考える……(3)
輸入穀類がストップしたら…？
—日本農業の体質への反省—
農林省農事試験場長・農学博士　川井一之
§ 最近の世界の異常気象と農業……(7)
産業科学学会会長・農学博士　大後美保
§ 新しい園芸資材とその利用方法……(11)
全国農業協同組合連合会 資材部技術主管　内海修一
§ クミアイカシミロン寒冷紗のすべて……(14)
旭化成工業(株)繊維資材販売部　北村　寛
※あとがき……(16)

とくに「食」構造の変化については，いちじるしいものがある。たとえば，少し資料は古いが，40年度に対して，47年度の食料消費の変化をみると，次のように大きなものがある。

肉　類	2.1倍	畜産食品
牛乳・乳製品	1.4倍	畜産食品
鶏　卵	1.3倍	畜産食品
油脂類	1.6倍	
砂　糖	1.5倍	
果　実	1.6倍	

このように，畜産食品の大きな伸びは，とりも直さず，食品中の全蛋白の中での動物蛋白質の割合が大きくなってきているわけで，40年度が36％であったのに，47年度には43％と大きく高まってきたことに現われている。これに反して，穀類・いも類などのでん粉質食料は，2割近くも減少し，1人あたりの食料の全カロリーでみると，40年度の63％から，47年度の53％へと大きく低下している。

食料品の品質からみると，加工食品が食料費の51％以上となり，ハム，ソーセージ等肉加工品などの洋風副食品のほか，菓子，酒，飲料などの嗜好品は，この10年間に2倍ないし3倍にも増加し，とくに冷凍食品は同じ10年間に，15倍という画期的な変化を示し，生活様式の，いちじるしい近代化を反映していることは注目される。

これらを，1人あたりの食料カロリーからみると，47年度には2,513カロリーと，はじめて2,500カロリーの大台をこえるまでに達した。

これを昭和24，25年頃の1,500カロリー前後の時代，昭和35年頃の2,000カロリーをこえた時代と比べると，栄養熱量の増加としても大きいが，それ以上に，良質蛋白やビタミン類等の栄養品質の高級化という点で，とくに近代化への特徴に着目されるべきことは，いうをまたないことであろう。

しかし，だからといって手放しで，食生活の高級化の評価が許されないところに，今日の問題，つまり自給率のいちじるしい低下というか，輸入農産物への過大な依存によって支えられた，食生活の近代化の基本的体質が，あらためて問われる時代となってきたのである。

食料戦略化の時代が，日本農業のアンバランスな体質，とくにオリジナル・カロリーからみた食料自給率が50％を割り（こんなに低いのは世界中日本だけといってよい），土地の遊休化，土地利用の崩壊が進むことと関係なく，輸入農産物による食生活の近代化・高級化が進んできているということへの矛盾を，大きく浮かび上がらせてきたということだ。

この矛盾の実態を，明らかに理解するために，〃もし，輸入穀類がストップしたら…？〃一体，日本の農業ないしは国民の食生活は，どうなるのか，という問題の解析にさっそく入ることにするが，その前に，冒頭にも述べたように，今日のかなり高級化した食生活（2,500カロリー台）に慣れた水準から，一挙に約25年前の1,400～1,500カロリー前後の時代まで，栄養水準を落したとしたならば，一体，日本の国民生活はどんなことになるのか。

買い占め，物価の狂乱，パニック，弱者飢餓，騒動等々，終戦後の国民食料の危機時代を経験した者には，背すじに冷水をあびる思いがすることは，まず間違いあるまい。

もはや，バターか大砲かの時代ではなく，バターも大砲もという時代になってきていることを思うとき，食料問題は，やはりナショナル・セキュリティの一面を抜きにしては，今日的意義をもたないことを，はっきりと認識しておかなければならない。

そればかりでなく，世界的飢餓問題をも考えるとき，自助努力による食料備蓄と，国際的援助協力の責任を果す上からも，これからの農業の新しい意義と役割とを，しっかりと農政の基底にすえた国際的政策が，たてられなければならない時代となってきたことを，まず強調しておきたいと思う。

〔近代的「食」構造は崩壊する〕

戦後30年間における日本の農業技術革新の成果には，きわめていちじるしいものがある。主要食料の稲作を始めとして，園芸や畜産，食品加工等の技術の進歩には，まさに画期的なものがあるといってよい。

幸いにして，米の100％自給を達成しうる能力をもっていることは，仮に輸入穀類がストップし

たとしても，食料危機を緩和する上に，かなり大きな力を発揮しうることは，終戦後のそれとは，格段と違う点であろう。

しかし，消費量の95％以上を，海外からの輸入に依存している小麦や大豆や菜種など，さらには食品栄養のハイライトたる畜産物が，その餌料の7割近くを海外輸入に仰ぐ，加工畜産の産物となっているという現実からみれば，もし穀類輸入がストップしたら，「食」構造のうち近代食品の大部分が，一般大衆の食卓から姿を消し去ってしまうという，大変な状況が推測される。

もちろんこれは，輸入ストップに対して，何ら積極的な対応策，自助的解決策を講じない場合の想定である。しかし現実には，このような状況を拱手傍観することは考えられない。何故ならば，その時は，それなりの食料自給度の向上策が，行政としても当然打ち出されるはずであるからだ。

さて，これらの問題に関しては後に再び考えることにして，まず，日本の食料の需給の現状，つまり食料自給率のいちじるしい低下と，それを補うための輸入農産物の激増の内容を，もう少し諸資料によって具体的にながめてみることにしよう。

右の図は，食料自給率の低下すう勢を示したもので，周知のことであるから，とくに説明を加える必要はあるまい。

問題は，食料農産物の国内生産と輸入との関係が，どうなっているかということで，これには，食料原料として輸入されたものが，人間食料仕向けの残りを家畜の飼料に廻すといった，循環利用の関係があるので，実態は細かくいえば複雑で，十分に理解しにくい部分もあるが，仮りに輸入穀類がストップしたら，とんでもない深刻な事態になることだけは，容易に推測できるが，その実態を推定すること自体は，大して現実的な意味をもたないので，少し見方をかえて，考えてみることにしよう。

そこで，仮に，このような潜在的食料危機構造を，長期的展望のもとに，改善して，たとえ輸入穀類が完全にストップしても，国内の食料自給度の向上で，これを完全にまかなうとしたならば，どういうことが必要となるか，という視点から，以下，各界の専門家の意見を総合しながら，少し大胆な推測を加えて検討を深めてみることにしたい。

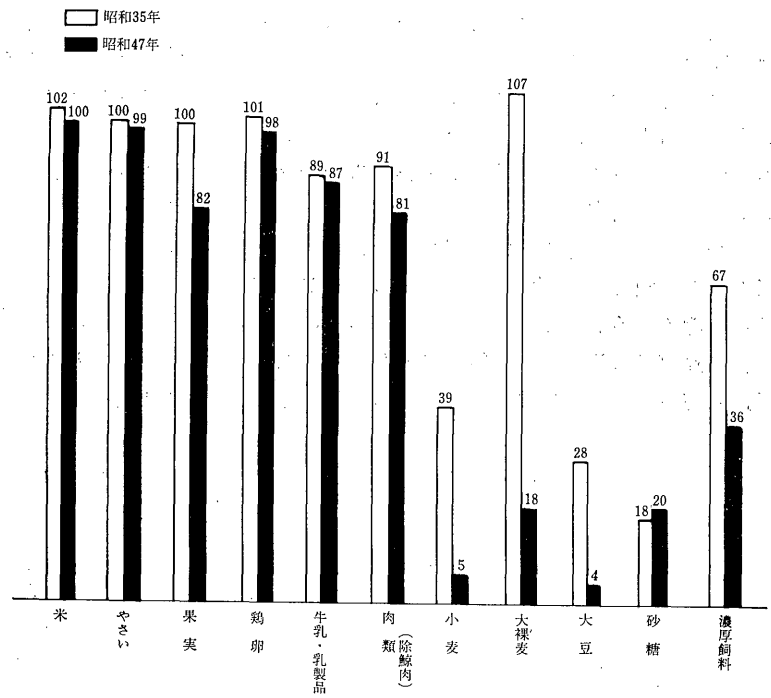
〔パンとハム・ソーセージ・ブロイラーはピンチ〕

まず，参考として，現在日本の食料需給のうち，海外から輸入を仰いでいる部分についての実態が，どうなっているかを示す表を掲げよう。

（次表参照）

このように，日本が食料や餌料として輸入している穀類は，約2,000万トンにも上っており，これを国内で生産するとすれば，およそ850万haの作付面積が必要になるというわけだ。現在日本の作付面積を約600万haとすれば，大体その1倍半程度の作付面積の増加がなければ，現在時点にお

農・畜産物の自給率の変化



いて完全自給を達成するということができないことになる（もっともこれには，いろいろの見方，計算の仕方で若干異るが，大ざっぱには，このように考えても差支えない。

（農産物の輸入量と，それを生産するに必要な作付面積）

種　類	輸入量	生産するのに必要な作付面積
小麦	5,148千トン	約200万ha
大・裸麦	1,004	〃 40
とうもろこし又はこうりゃん	9,556	〃 350
大豆	3,396	〃 240
その他穀類	306	〃 15
（小計）	（19,410）	（〃 845）
ふすま・米ぬか	174	〃 10
穀物かすビートパルプ	292	〃 5
乾草類	493	〃 5
植物油かす類	319	〃 25
合計	20,688	（約890）

また，畜産の面からみれば，輸入穀類約 2,000万トンのうち，濃厚飼料が約1,200万トンぐらいであるから，この1,200万トンの輸入濃厚飼料が全く入らなくなれば，まず鶏や豚は壊滅的な影響をこうむることになる。おそらく，ブロイラー養鶏は完全に全滅し，採卵養鶏は半分近くに減り，養豚は6割近くに縮少せざるをえなくなるとみる専門家の意見もある。

この場合，輸入濃厚飼料に比較的依存度の少ない酪農や肉牛では，1～2割ないし，多頭飼育経営では5～6割にも及ぶ減少が現われるのではないかという考え方もある。

しかし，これはあくまでも現状についてのことであって，現在850万haの作付面積の増大が，仮りに可能であるとするならば，一応，食料の完全自給は達成されるという試算にすぎないのであって，農林省が57年度を目標にしている農業生産の見通しを実現するためには，さらにこの3～5割増しの1,000～1,200万ha ぐらいの作付面積が必要になる。結局，現状の作付面積の倍増ぐらいは絶対的必要条件であると考えなければならないであろう。

〔おわりに〕

これはあくまでも，「輸入なかりせば」計算上の問題だが，それにしても，国民食料の安定的供給を使命とする農業の体質が，こんなにイビツな貧弱なものになってしまったということは，重大な問題である。

今日，農業は，安全にして品質良好な食料を十分に補給するばかりでなく，農業者および都会人に，健全な緑地空間を与え，物質循環機能をもはたすなど，これからの日本の産業と文化の上に，新しい役割が期待される重要な産業である，ということがいわれている。

そのためには，しっかりした農政の基本目標の確立と，農林行政の画期的な推進が必要だが，何といっても農業者に「やる気」と「生きがい」を起こさせる対策が，最も大切な問題である。これまでのように，儲けの経済尺度で農業を評価する価値観ではなく，国民の福祉に寄与する新しい価値観にもとずく農林行政というものが，不可欠なのではないだろうか。

農業者自身も，下を向いて卑屈な気持で歩く姿勢を捨て去って，上を向き胸を張って，国民の福祉は俺たちが守るという誇りと使命感をもって，堂々とカッコいい農業を主張すべき時代になってきたことを，みんなが自覚すべき時代になってきた。

昭和50年の新年は，その意味で，新しい農業の時代の始まりとして意義づけねばならぬものと，私は確信をもって主張したい。